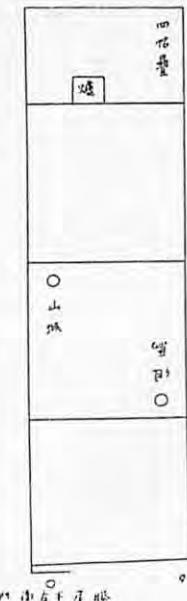


はらひ切り、先づ右の腕に當る。山城・半左衛門つゞけて切る。三太刀目に、首より歯まできり、切りとまる。利長様御出被成、幸五郎二郎せがれ雅樂助の刀にて、三太刀被遊山なり。半左衛門を利長様と心得たる躰と云ふ。

御間の圖



關屋政春古兵談には、御城の廣間にて、其の頃石垣の修繕被命、帳を持参但馬に見する。但馬座して片膝を立て、大脇指を差して、帳を披き一覽する處を、立ちながら抜打ちに眉間を切る云々。利長卿御長刀の鞘をはづし御出被成、主の目を闇まかし不届なる奴と被仰、長刀の石突にて但馬を突かせ給へば、其時物はいはず、かぶりふりたりと聞き及ぶ也。とあり。右は慶長七年の事にて、此の頃は利長卿、右鶴丸の便殿に居給ひし事知られけり。おもふに、此の前

年慶長六年九月、世子利光卿の小君天徳夫人江戸より入興、本丸に新殿造営ありて、爰に居給へり。三壺記にも、江戸より姫君御興入らせらるとの上意に付きて、金澤御本丸に新造の屋形を建てさせ給ひ、その美々敷事、筆紙の及ぶ所にあらずと。されば此時利長卿は鶴丸に別殿を建て、爰に居館し給ひたるものなるべし。さて其の地所は、聞見雜錄に、雷之御屏風の事、金澤城水手の傍に利長卿御座之時、雷落御座右。則金屏に煙懸りて爲雲形。といふ事見にたれば、鶴丸水手門の傍に便殿ありしと聞ゆ。右の御座右へ雷の落ちたるも、慶長七八年か、九十年頃の事なりしかど、記録に所見なきゆゑ詳かならず。能登國富木の大福寺に藏する利家卿の判書に、尾山のひろまへかみなり落ち、其そばに孫四郎居候て、少しひゞきにあたり候へども、何事なく候。と載せられたれど、是は文祿以前の事なるべし。又龜尾記に、加州野田桃雲寺に、太田但馬守殺害の時血のかゝりたる屏風を、其儘當寺に傳來す。とあり。此の屏風は慶長七年五月十四日、但馬守を殺害せし時座右にありしものにて、彼の雷火に爲雲形とある屏風とは異

なるべし。

## ○鶴丸人質小屋

古兵談殘叢集に云ふ。大坂寅・卯の二役に、三ヶ國の一向坊主暨び百姓・町人の頭立ちたる者共を、人質として鶴丸に小屋を作り入れ置かれ、奥村快心・今枝宗仁を其奉行となし、晝夜三度宛來見し、其者共は各、自賄にて居たりしと。此時質人たりし高岡の幽谷院主六十歳なりし頃、有澤永貞に語る。とあり。按するに、大坂寅・卯の二役とは、慶長十九年十二月の冬陣と、元和元年五月の夏陣との兩軍役をいへり。十九年十二月廿日の日附にて、奥村伊豫守・三輪志摩守・横山夕庵三人連名にて、鹿島郡肝煎惣百姓中と宛申付候儀、有之間敷云々。とあり。右達書にて見れば、人質せし達書に、當御陣中を々所々長百姓等證人被召上に付て、從公儀二人扶持宛被下置候條、下々小百姓中与内申付候儀、有之間敷云々。とあり。右達書にて見れば、人質奉行は、奥村伊豫守に三輪志摩・横山夕庵と三人して奉行せしと聞ゆ。又賄方も、二人扶持宛賄はるとあれば、自賄といふは、自炊の事ならんか。小百姓中与内云々とある与内は餘荷の事也。三州志難叢餘考に、慶長十九年十月